

平成 24 年 5 月 30 日	病害虫発生予報 6 月号	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
---------------------	-------------------------------	------------------------

梅雨の晴れ間を利用し、確実に防除を実施しましょう！

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
水稻：いもち病(葉いもち)，イネドロオイムシ・・・・・・・・・・・・・・・・	1
ナシ：黒星病，ナシヒメシンクイ・・・・・・・・・・・・・・・・	2
【防除所レポート】：ナシヒメシンクイ ・・・・・・・・・・・・・・・・	3
果樹共通：カメムシ類・・・・・・・・・・・・・・・・	4
【防除所レポート】：果樹カメムシ類 ・・・・・・・・・・・・・・・・	4
半促成ピーマン：うどんこ病・・・・・・・・・・・・・・・・	5
夏ネギ：黒斑病・・・・・・・・・・・・・・・・	5
夏ネギ：べと病・・・・・・・・・・・・・・・・	6
【防除所レポート】：麦類赤かび病 ・・・・・・・・・・・・・・・・	6
【防除所レポート】：イチゴ炭疽病 ・・・・・・・・・・・・・・・・	7
【その他の病害虫】 ・・・・・・・・・・・・・・・・	8
水稻，ナシ，ブドウ，半促成ピーマン，抑制トマト，夏ネギ	
II. 今月の気象予報 ・・・・・・・・・・・・・・・・	9
<p>水田において農薬を使用するときは、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とすること。</p> <p>最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。</p>	
<p>詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。</p> <p>茨城県病害虫防除所 Tel : 029-227-2445</p> <p>予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。</p> <p>ホームページアドレス http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/</p>	

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（葉いもち）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、置苗でのいもち病の発生は、例年どおり認められない。

発生好適条件：気温 20～25℃で、弱い雨や霧などが続いてイネの葉が長時間ぬれるような条件のとき。一般的に6月の高温多湿、7～8月の低温多雨は発生を助長する。

[防除上注意すべき事項]

- ① 置苗はいもち病の発生源となるため、速やかに本田から持ち出して埋める等処分する。
- ② 中干し等の栽培管理を徹底し、イネの健全育成に努める。
- ③ 常発地で、育苗箱施用剤を使用していない水田では、特に発生に注意する。
- ④ 葉いもちは例年6月下旬から発生する。粒剤による本田防除の適期は初発前～初発時なので、適期を逃さずに防除する。なお、薬剤により使用時期は異なるので注意する。
- ⑤ 粒剤の施用は中干し時期を避け、湛水状態にしてから散布し、1週間程度の止水期間を守る。

2. イネドロオイムシ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、25株調査における越冬成虫数(本年0.7頭、平年0.1頭)、卵塊数(本年0.5、平年0.1)ともに平年より多い。
- ② 1か月予報によると、後半は、曇りや雨の日が多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 例年の発生推移としては、幼虫が6月上旬頃から発生し、6月下旬に被害が最も多くなる。7月上旬には終息するが、幼虫の発生が多く、食害が目立つ場合は防除を行う。
- ② 長期に曇雨天が続く場合や、霧が発生する地域等では発生が多くなる傾向があるので注意する。

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在，発病葉率は平年並（本年0.1%，平年0.2%），発病果率は平年より高い（本年0.8%，平年0.2%）。
- ② 気象予報によると，向こう1か月の気温は平年より低く，日照時間は平年より少ないと予想され，発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病した果そう基部，葉及び果実は二次伝染源となるため，見つけ次第除去し，薬剤散布を行う。取り除いた葉や果実は，土中深く埋める等，適切に処分する。
- ② 薬剤散布は雨の合間をみて行う等，参考防除例を参考に間隔が空かないように注意し，予防に努める。
- ③ 薬剤は，10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等，薬液のかかりにくい部分に対しては，手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在，県予察圃（笠間市）に設置したフェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は平年よりやや多く，5月第5半旬までの総誘殺数は過去11年中3位である。
- ② 5月下旬現在，地区予察圃（小美玉市，笠間市，かすみがうら市）及び土浦市に設置したフェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は平年より多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後，次世代成虫（第一世代）が発生するため，情報を参考に第二世代幼虫の適期防除に努める。
- ② 薬剤は，10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等，薬液のかかりにくい部分に対しては，手散布等により補正散布を行う。

ナシヒメシクイの第二世代幼虫の防除適期

- ① ナシヒメシクイは第二世代以降の幼虫がナシ果実を加害する。
- ② 第二世代幼虫を対象とした防除適期は、第一世代成虫の誘殺最盛期の7～9日後である(図)。
- ③ ナシヒメシクイの発育に有効な気温の積算値から、第一世代成虫の誘殺最盛期及び第二世代幼虫の防除適期を予測すると表の結果となる。
- ④ 発生時期の予測は5月28日現在であるので、今後の情報を引き続き参考にする。

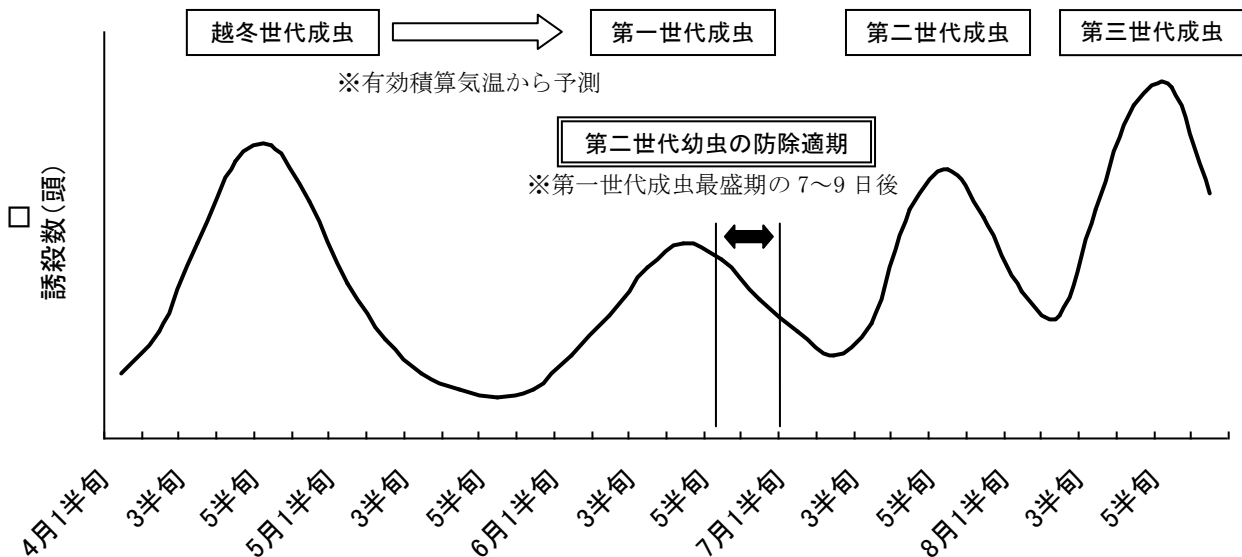


図 フェロモントラップによるナシヒメシクイ雄成虫の誘殺数の推移モデル

表 ナシヒメシクイ第二世代幼虫を対象とした防除適期

地点	越冬世代成虫の誘殺最盛期 ¹⁾	第一世代成虫の予測される誘殺最盛期 ²⁾	第二世代幼虫の予測される防除適期 ³⁾
茨城町	4月第6半旬	6月第5半旬	6月27日 ~ 7月1日
笠間市(旧友部町)	5月第1半旬	6月第5半旬	6月28日 ~ 7月3日
笠間市(旧岩間町)	4月第6半旬	6月第4半旬	6月25日 ~ 6月29日
小美玉市	5月第1半旬	6月第5半旬	6月28日 ~ 7月3日
かすみがうら市	4月第6半旬	6月第4半旬	6月23日 ~ 6月27日
土浦市	5月第1半旬	6月第4半旬	6月25日 ~ 6月30日
筑西市	5月第1半旬	6月第4半旬	6月25日 ~ 6月30日

1) 各地点に設置したフェロモントラップへのナシヒメシクイ越冬世代成虫の誘殺最盛期

2) ナシヒメシクイの発育零点を11.1℃とし、越冬世代の誘殺最盛期からの有効積算温度が384日度となる日を予測(5月28日現在)。

3) 有効積算気温から求めた第一世代成虫の誘殺最盛期の7～9日後

果樹共通

1. カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、果樹園に設置した予察灯へのチャバネアオカメムシの誘殺数はかすみがうら市で平年より多く、笠間市で平年並である。
- ② 5月中旬現在、サクラの叩き落とし調査では、チャバネアオカメムシの発生量は平年より多い。
- ③ 本年2月上旬の越冬量調査におけるチャバネアオカメムシの越冬成虫数は、平年より多く（過去11年間の中で多発生した平成18年に次いで多い）、越冬地点率は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 夜温が高いと活動が盛んになり、果樹園へも飛来するので注意する。果樹園内でカメムシ類を確認した場合には、活動が鈍い早朝に薬剤防除を行う。
- ② 多目的防災網（6mm目及び9mmクロス目以下）を張ると防除対策として有効である。

防除所レポート [サクラにおける果樹カメムシ類の発生状況]

- ① サクラの叩き落とし調査では、5月中旬で平年より多く、5月下旬で平年より少ない（図）。
- ② 吸汁されたサクラ果実の割合は、5月下旬で96.7%と平年より高い。
- ③ 多くのサクラ果実はカメムシ類に吸汁されている。既に他の植物に移動しており、今後、餌を求めて果樹園へ飛来する可能性があるので注意する。

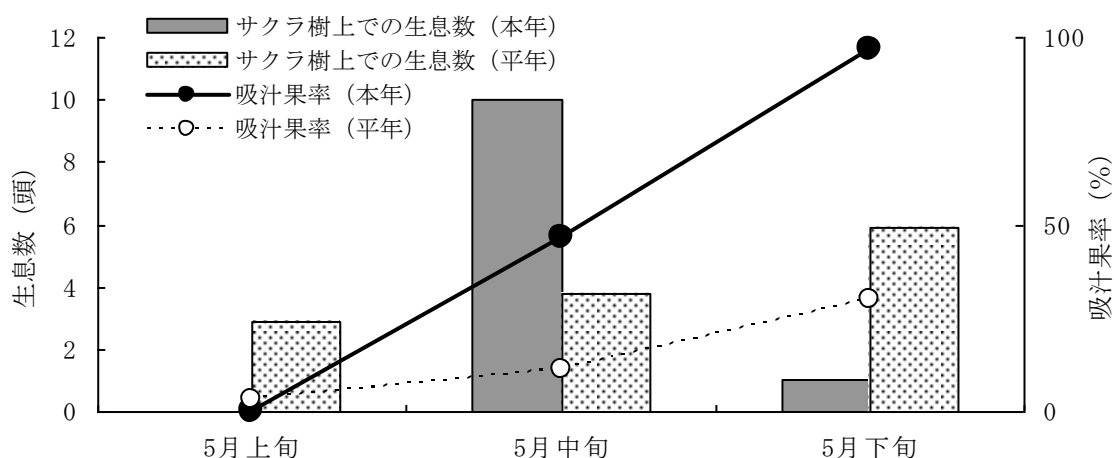


図 サクラにおけるチャバネアオカメムシの生息数と吸汁果率

半促成ピーマン

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、発病度、発生地点率ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため、病斑の多い葉は取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう、十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、系統の異なる薬剤を散布する。

夏ネギ

1. 黒斑病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、発病度は平年より高く、発生地点率は平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より低く、後半は曇りや雨の日が多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病初期の防除に重点をおき、その後の発病状況に応じて薬剤散布を行う。
- ② 薬剤散布は展着剤を加用し丁寧に行う。また、薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 肥料切れや多肥は発生を助長するため、生育状況に合わせ適切な肥培管理を行う。

イチゴ炭疽病の防除を育苗期から徹底しましょう！

イチゴ炭疽病は、主に育苗時に発生し、近年多発傾向にある。親株や苗を萎凋枯死させて定植苗の不足を招き、定植後も株の枯死等を引き起こす。病原菌は糸状菌(かび)の一種で、生育適温は28℃前後であり、7月～9月の高温期に発生が多い。潜在感染した親株や土壌中の被害残渣に存在する胞子が伝染源となり、降雨や頭上灌水による水滴の跳ね上がりにより二次伝染する。

イチゴ炭疽病は、育苗期の発生量が多いほど本圃でも発生が多い傾向が見られており(図1)、育苗期の徹底した防除が重要である。

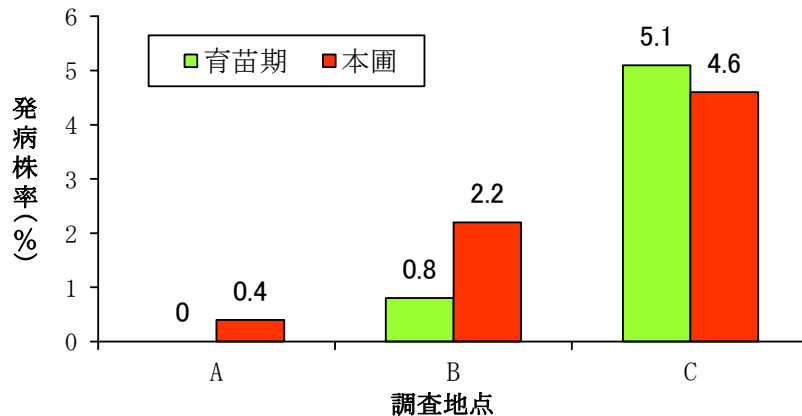
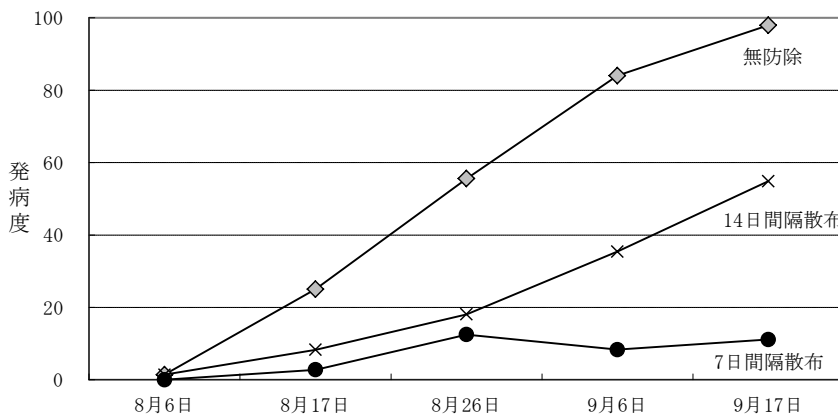


図1 育苗期および本圃定植後のイチゴ炭疽病の発病株率(平成23年 園芸研究所調査)

※発病株率は、育苗期は仮植後から9月2日まで、本圃は定植後から11月15日までの累積値である。

育苗期における防除のポイントは、以下の通りである。

- ① 育苗管理は、雨よけで行う。
- ② 育苗床や通路を透水性のあるシートで被覆したり、プランターを利用して地面から離れたベンチの上で栽培する等、水滴の跳ね上がり防止に努める。
- ③ 株元に灌水したり、水圧を下げて灌水し、灌水時の水滴の跳ね上りを防ぐ。
- ④ できるだけ苗と苗の間隔を広くとって通風を心がけ、多湿になるのを防ぐ。
- ⑤ 一週間程度の間隔で薬剤散布を実施すると防除効果が高い(図2)。
- ⑥ 薬剤によるローテーション散布を行う場合、県内でアズキシストロビン水和剤(ストロビルリン系薬剤)とベノミル水和剤(ベンゾイミダゾール系薬剤)に対する耐性菌が確認されているため、使用を避ける。
- ⑦ 発病株を見つけた場合は、直ちに抜き取り適切に処分する。発病株の周辺の苗は感染している可能性があるため、葉や葉柄部の病斑をよく観察する。



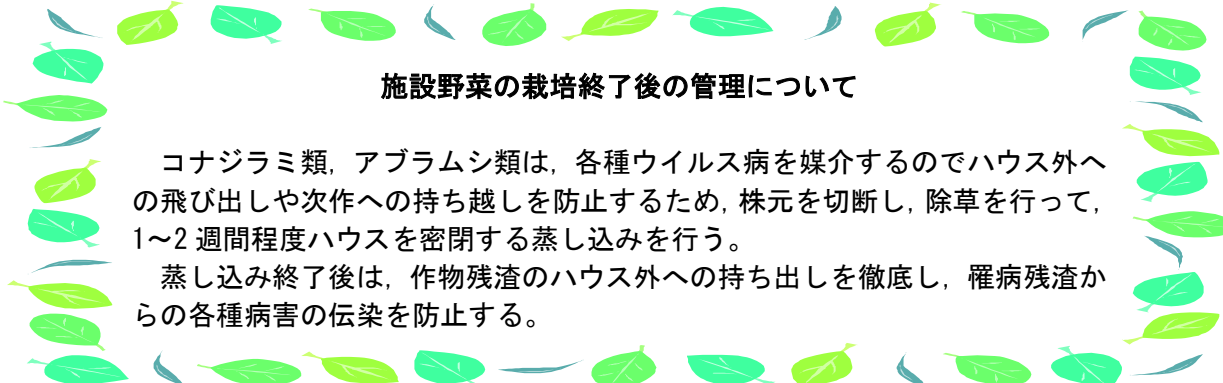
発病度は、発病程度を
 0: 発病を認めない, 1: 小葉または葉柄にわずかな病斑(10個以内), 2: 小葉または葉柄に多数の病斑, 3: 葉柄の折損, 4: 株全体の萎凋または枯死
 とし、 $\Sigma(\text{程度別発病株数} \times \text{程度}) \times 100 / (4 \times \text{調査株数})$ で算出した。

図2 散布間隔の違いによるイチゴ炭疽病の発病度の推移(平成22年 園芸研究所調査)

※7月9日～9月10日まで薬剤散布を実施。7月10日に罹病株を配置した接種試験。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	黄化萎縮病	発生量：－	移植後 10～50 日の間に冠水すると発生の恐れがある。常発地で冠水した場合には、防除を行う。
	イネミズゾウムシ	発生量：やや多い	5月下旬現在、やや多い発生である。イネの初期生育が遅い水田、育苗箱施用剤を使用していない水田では発生に注意する。
	ニカメイガ	発生量：平年並	5月下旬現在、フェロモントラップにおける誘殺数は平年並である。本虫の発生は、近年、局地的に増加しているので注意する。
ナシ	輪紋病	発生量：－	いぼ皮病斑が見られる圃場では、5月下旬頃から孢子が飛散するので、防除を徹底する。
ブドウ	灰色かび病	発生量：平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。
	べと病	発生量：平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。
ピーマン 促成	アザミウマ類	発生量：やや多い	5月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
抑制 トマト	黄化葉巻病	発生量：－	育苗時に感染すると大きな被害となるので、苗を0.4mm 目合い以下の防虫ネットでトンネル被覆し粒剤を施用する等、タバココナジラミの防除を徹底する。
夏ネギ	ネギアザミウマ	発生量：平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。



施設野菜の栽培終了後の管理について

コナジラミ類、アブラムシ類は、各種ウイルス病を媒介するのでハウス外への飛び出しや次作への持ち越しを防止するため、株元を切断し、除草を行って、1～2週間程度ハウスを密閉する蒸し込みを行う。

蒸し込み終了後は、作物残渣のハウス外への持ち出しを徹底し、罹病残渣からの各種病害の伝染を防止する。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 5月26日から6月25日)

気象庁(5月25日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	40	30	30
	降水量	関東甲信全域	30	40	30
	日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[概要]

前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。

<1週目の予報> 5月26日(土曜日)から6月1日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率40%

<2週目の予報> 6月2日(土曜日)から6月8日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率40%

<3週目から4週目の予報> 6月9日(土曜日)から6月22日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず、良く洗浄しましょう。